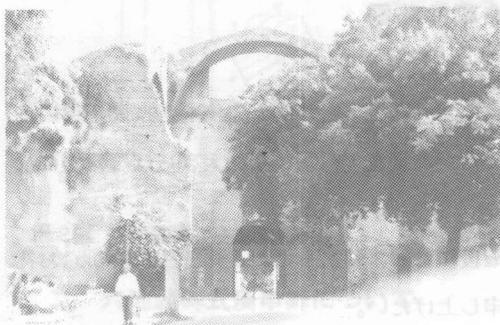


ローマ国立博物館を訪れて

山本晴樹



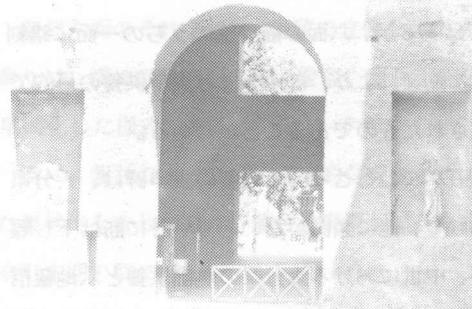
第1図 博物館の入口

テルミニ駅(終着駅)からほど遠くない所にあると聞いて、ローマ国立博物館(Museo Nazionale Romano)見学に出かけた。いざ着いてみると、博物館をとり囲む壁ばかり見えて肝心の入口が見つからない。小一時間右往左往したのち、やっとの思いで見つけた。一般に、ローマの遺跡・博物館は入口を見つけるのに一苦労する。前もって案内書などで入口のある場所を調べていかないととんだ失敗をする。

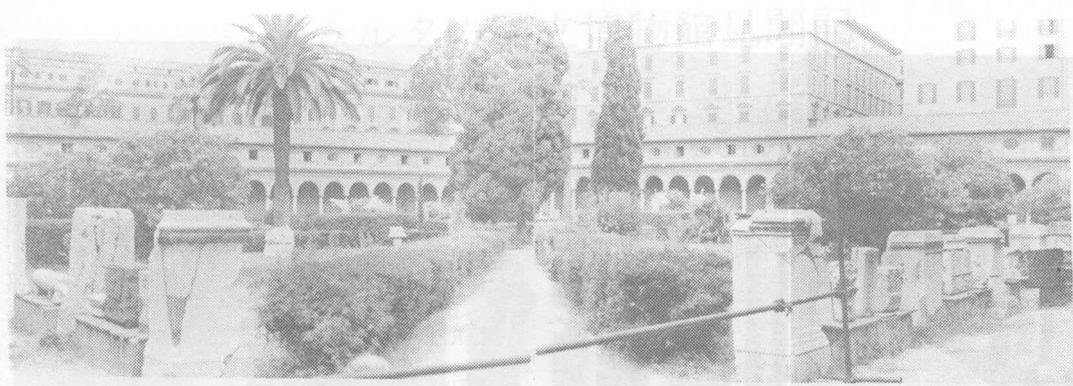
さて、その入口で200リラを払い中へ入っていくと、比較的大きなドームの中に立つ。周知のように、この博物館はローマ帝政末期、ディオクレティアヌス(Diocletianus)帝によって建てられた浴場跡を利用している。従って、このドームはその位置からして、浴場内の脱衣場(Apodytheria)跡と思われる。そこを抜けると、小じんまりとした庭に出る。その奥に二階

建ての館が現われる。これが本来の意味でのローマ国立博物館である。

この博物館は二階建ての本館以外に、正方形の中庭に面した回廊をもっている。本館に入ると入口ホールではローマ歴代皇帝の胸像がまず目には入る。ティベリウス(Tiberius)、ハドリアヌス(Hadrianus)、マルクス・アウレリウス(Marcus Aurelius)等々。入口ホールに続く部屋に入ると、いわゆるルドヴィシ(Ludovisi)・コレクションと呼ばれるこの博物館の至宝群が置かれてある。そのうちでは何とんでも『ヴィーナスの誕生』が挙げられるべきであろう。1928年1月ここを訪れた和辻哲郎はその著『イタリア古寺巡礼』の中で、『ヴィーナスの誕生』にふれ以下のように述べている。「所謂ルドヴィチの王座『ヴィーナスの誕生』などはその中でもまた一番美しいものである。Hと二



第2図 入口の門



第3図 中庭風景

人でこの前に立ったときには、私はむしろ落ちつけなかった。これはゆっくり見に来よう、もっと落ちついて見に来よう、そんな風に心のなかでつぶやいた。その後もう何度かこの彫刻を眺めに来た。見る度に何ともいえない味が出てくる。何と云ってもローマ第一等である。』『ヴィーナスの誕生以外にも見るべき作品は数知れないが、『ニオベの像』『キュレネのヴィーナス』『拳闘士』『妻を殺したのち自殺するガリア人』などが代表的なものであろう。これらの作品が置かれてある部屋自体を見てみると、部屋の中央部の床にモザイク模様を描かれていた。いかにもローマ風の博物館を思わせるものである。

本館二階はフレスコ及びストッコの作品が主体である。階段を上ってすぐの部屋に入ると、中はやや狭く、照明がないせいか薄暗く陰気である。その暗さに目が慣れてくると、四面の壁に木々が描かれているのに気づく。さらに目をこらすと、その木々には鳥が群れている。これが『リヴィアの別荘』で有名なフレスコである。この図を見ていると、ローマ人の田園への憧れがどのよう

なものであるかわかるような気がする。

本館に付属している回廊の面する中庭は、一辺が50mほどの正方形である。この中庭は写真でもわかるように、中央に噴水を配し、そこから放射線状に遊歩道がのびている。特徴的なのは、噴水の周りに二頭の牛と馬の頭をかたどった彫刻が置かれ、それぞれが遊歩道の方を向いていることである。回廊には、胸像・立像・石棺などが所狭しと並べられてある。一つ一つ見ていけばとても一日では見終らないほどの数である。その中で特に印象に残ったものが写真の胸像である。高さは人のそれぐらいで、さほど大きくはない。初老の人であろう、厳格さが顔ににじみ出ており、いかにも果敢なローマ人を思わせる。この像が最初目に飛び込んできたとき、てっきりカエサル(Caesar)像だろうと思ったが、聞いてみると違ふとのことであった。それにしても典型的なローマ人の風貌である。

回廊・中庭を見て思ったことは、もう少し各作品の配列がどうにかならないものかということであった。あまりにも配列が雑然すぎる。というの



第4図 回廊の一翼



第5図 回廊内の一胸像

も、後にヴァチカンのピウス・グレゴリアヌス博物館 (Museo Pio Gregoriano) を見学したとき、そこで作品の展示が現代的であることに驚いたからである。確かに博物館自体が近代建築であったせいもあるが、それにしても展示の感覚の新しさには驚嘆した。その展示は作品のもつ古さを感じさせず、あたかも前衛芸術の美術館にでもいるような気を起こさせた。

以上、訪問記を書きつらねてきたが、なにぶん夏の盛りの、時間に縛られた見学であったから、「仁和寺にある法師」の例にもれず肝心なものを見落したかもしれない。この文を記している現在和辻哲郎のように、もう一度「ゆっくり見に来よう、もっと落ちついて見に来よう」という感を強くしている。